

## 小代の文化財

# — 巖嶽神社 —

設楽町文化財保護審議会委員

加藤博俊

はじめに

愛知県の北東部一帯は奥三河と呼ばれ、古くからの伝統が今も生き続ける地域として知られている。近年低山登山の流行もあり、山登りをしながら観察会や歴史探訪に訪れる人が増えてきた。中には地元の人より詳しく知っている人もいるようで、感心させられる。最近、塩津・小代地区について尋ねられることがあった。しかし、詳しいことがよくわからないため、現地調査をして調べることにした。

### 1、巖嶽神社

設楽町の南東部にそびえる鞍掛山（882.6m）北西斜面の麓に鎮座する巖嶽神社は、標高約460m 小代集落では最も高い場所に祀られる。



巖嶽神社境内

集落内を通る町道塩津・小代・清崎線を登りつめ、道路横にある参道の石段を登ると、約500㎡の境内が広がる。そこには、立派な神殿と農村舞台風の社務所が建っている。石段横に道祖神、神殿右上には山神が祀られている。祭神は木花之開耶姫（このはなのさくやびめ）で、この地区の氏神として信仰されている。

「日本神話では大山祇神（おおやまつみのかみ）の娘で、天孫瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）の妃。火闌降命（ほのすそりのみこと）・彦火火出見尊（ひこほほでのみこと）・火明命（ほあかりのみこと）の母。後世、富士

山の神とみなされ、浅間神社に祀られる。」



階段横の道祖神

この神社について村落誌の記述によると、現在の神社より北東600mにある、柿ノ平のヌメリ川のほとりに文応元年（1260）岩竹神社として創建された。その後享禄4年（1531）奥平氏により現在地に遷宮された。柿ノ平の岩竹神社跡については480年の年月があるため、社跡は不明となっている。承応3年（1654）と元禄8年（1695）の「岩竹神社再建棟札」がある。明治元年（1868）社名が岩竹神社から「巖嶽神社」に改称され、同12年、八幡神社と白山神社が巖嶽神社境内に遷された。

その後、昭和9年巖嶽神社・八幡神社・白山神社の三社が合祀されて「指定村社」となった。大祭は10月で、御殿山の八幡宮から継承された「子供三番叟」が奉納されている。



境内右上の山神

## 2、八幡宮跡

塩津温泉の東部にそびえたつ、御殿山の険しい山腹に八幡宮跡がある。そこには寛文 8 年（1668）池鯉鮒（知立）の住人奉獻の、手水鉢が残されているといわれる。

平成 23 年 3 月 21 日八幡宮跡地の調査を行った。1 日中岩のガラ場や絶壁を、登り降りして探すのであるが、見つけることはできなかった。数日後再度試みようと思い、地元の歴史に詳しい人達から跡地について詳しく教えてもらい、調査にあたることになった。



御殿山の八幡宮を望む

3 月 25 日塩津の天神社から、御殿岩の真下に通じる谷に入る。谷川の右岸に山道があり、そこを登っていくと、約 600m の所で山崩れによって道はなくなっていた。ここから、3ヶ所の沢を登ってみたが、いずれも崩壊と絶壁で先に行くことはできなかった。一番南の谷から登ってみると、ようやく御殿岩の真下にたどり着いた。昼過ぎまで探してあきらめかけたところ、御殿岩の真下より北に約 200m の所で少しの山道と石段を見つけることができた。やっとの思いでそこにたどりつくと、幅 1.5m、11 段の石段を確認することができた。石段を登るとそこには、東西 5m、南北 7m の長方形をした拝殿跡がある。その中心あたりに奉獻された手水鉢が据えられていた。そこには「献上・小代山・八幡宮・寛文八戌申年・五月十五日・三州池鯉鮒町・永田清七郎内」と刻まれていた。石段は上へと続き、10 段目で幅 1.5m 奥行 1.7m の踊り場が作られ、更に 37 段登ると二つ目の踊り場に着く。両脇に大石があり、その石段を 4

段登った所に 5m 四方の神殿跡が、山頂までつながらる絶壁を背にするように残されていた。



八幡宮跡

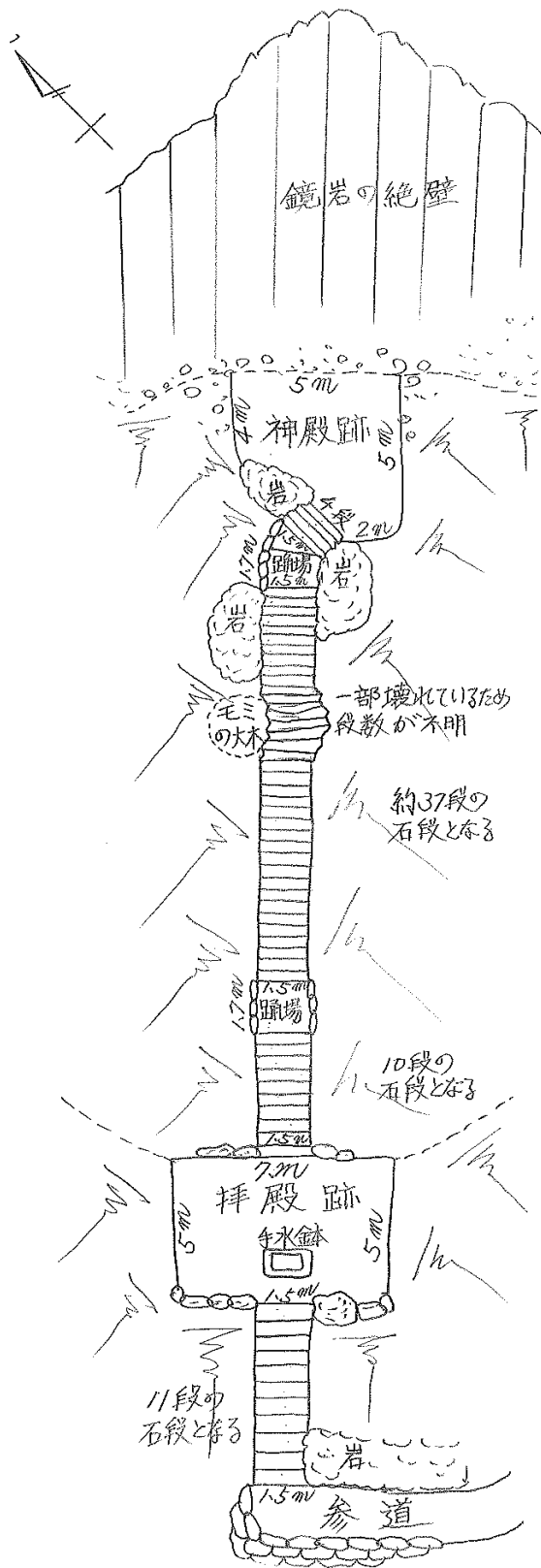
そこに立つと 10 km 先の竜頭山 (752.3m) の山々や、豊川の谷間を一望する絶景の場所となっていた。さっそく写真とスケッチに取り掛かる。大まかな調査ができた頃、少し薄暗くなりかけていた。もう少し詳しく調べたいところであるが、正直危険な場所のため、二度来ることはできないと思いつつ、後ろ髪をひかれる思いで下山をした。

神が鎮座するのに相応しい場所であるが、ここまで来てお祀をするのは大変なことだと思う。そのためか洞の金田さん宅前には、八幡宮を拝むための遥拝用の鳥居が残されている。鳥居の前に立つと、八幡宮と御殿岩が真正面に見える。その距離 1500m、当時の人の拝む姿が目に見えようであった。

村落誌の記述には、文禄 2 年（1593）奉建立され、御殿山八幡宮一宇殿・氏子繁昌所・施主奥平久府尉久矩とあり、「明暦 2 年（1656）鳥山精明再建」及び「寛文 3 年（1663）鳥山牛之助精明拝殿建立」の棟札がある。



遥拝用の鳥居



写真・スケッチ 加藤



拝殿から本殿への石段



拝殿跡



献上の手水鉢

小代村御殿山八幡宮 神主 彦太郎

- ・本殿 (大板ふき)  
長八尺七寸五分・横七尺七寸五分・高九尺七寸
- ・拝殿 (そぎぶき)  
長三間・横一間半
- ・御除地  
高式石目 八幡宮除地 神主 長太夫
- ・八幡宮森  
神田村境 黒岩塩津村境式枚出シ  
享保六丑年八月 (1721) 村指出帳より

夏目順啓調べ

### 3、白山大権現跡

巖嶽神社の南東約 230m の洞に社跡がある。井戸上の金田さん宅、南の小さな沢を約 100m 上流に登ると、砂防ダムが作られている。これより北斜面を約 20m 登った所に社跡は残されていた。現在スギ林に覆われ知る人も少なく、痕跡も少ない。

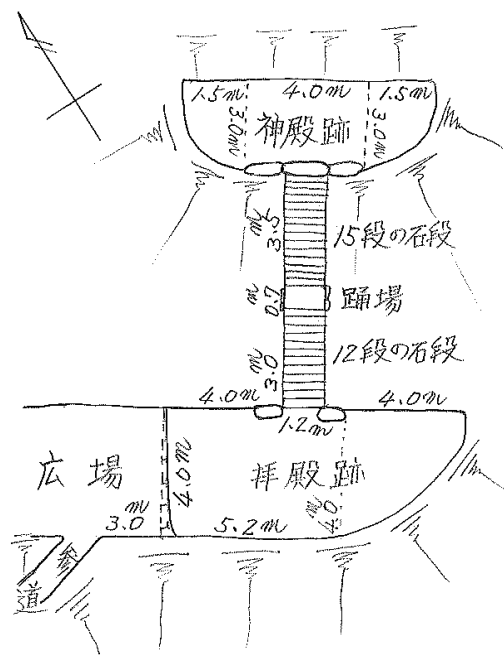


#### 巖嶽神社から白山神社跡を望む

平成 23 年 4 月 12 日現地調査をする。そこは、低木が茂り、スギの枯枝が沢山つもり、わずかに平地らしい所が見られるだけであった。低木を刈り払いたくさんの枯枝をとりのぞいてゆくと、平地は広がり、東西 10m、南北 5m の長方形をした拝殿跡が出てきた。山側中心あたりの土を少し取り除くと、表面には見られなかった幅 1.5m の石段を見つけることができた。土を取り除きながら登ってゆくと 20 段の石段が姿を現した。石段の上にも低木と枯枝に覆われた平地らしい所があるので、刈り払い枯枝を取り除くと、東西 5m、南北 3m の長方形の神殿跡が残されていた。



拝殿跡と石段



#### 白山神社跡のスケッチ

村落誌には、この神社は白山比咩（しらやまひめ）大神を祭神に迎え、元禄 2 年（1689）に村中により再建され、安永 2 年（1773）と寛政 9 年（1797）に再々建された。その後、明治 12 年（1879）に白山神社として巖嶽神社境内に遷された。



#### 神殿跡

白山神社のすぐ下には、カシヤゲ峠から鞍掛山の山腹をほぼ水平に横切るように古い伊那街道が通っていた。ここから巖嶽神社の西側上部を通過して松山峠で、旧伊那街道と合流している。しかし、江戸時代初期にはカシヤゲ峠から約 5 km 南の与良木峠を越えるルートに変わり、小代地区は本街道から外れてしまうことになる。

#### 4、小代の子供三番叟

設楽町の無形民俗文化財になっている子供三番叟は、現在、10月最初の土曜日の夜、氏子の家内安全や五穀豊穡を願い巖嶽神社に奉納されている。起源は不明だが小代城主奥平久府の病氣平癒のため、村人が八幡宮へ奉納したのが始まりと伝えられる。



朝日に鶴の紋が入った上衣

神社の解説書には次のように記されている。今日では小代部落の村氏神・巖嶽神社例祭の奉納行事のようにになっているが、もとは、同部落の塩津寄りの山中「八幡平」に鎮座した八幡社の奉納行事だったといい、明治初年、この八幡社が巖嶽神社へ合祀されるに際し、本行事もまた、同社で行うようになったといわれる。

ここには舞台がしつらえてあり、三番叟もそこで奉納してきたが、昭和十年ごろ、社殿改築があって舞台が取り払われ、以後、拝殿を使用するようになったと伝える。従来この両社は、地元の禰宜屋敷（屋号大屋）が中心で祭祀してきたが、大正末から正式の神官が神事を執行するようになったという。



囃子方（太鼓・笛・拍子木）

祭日は古くは旧八月十五日であったが、のち十月八日になり、さらに戦後は十一月三日に改められた。

三番叟の直接の奉仕者は、囃子方（太鼓一人、笛二人、拍子木一人）と、踏みコ（二人）である。囃子方は青年が奉仕し、踏みコは十五歳位までの男子で、ブクのかかっている子供がつとめる。近年は部落の子供が激減した関係上、一人の子供がいく年も連続してつとめることもあるが、本来は年長者から一年交代で奉仕するのが習わしである。この踏みコは、祭り前別火で生活したというが、明治初年から神主のお祓いを受けるだけになった。



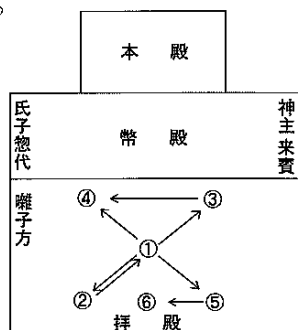
八幡社の紋、剣カタバミのタテ烏帽子

三番叟は宵祭り（前夜祭）の行事で、当夜は神事が約一時間あったのち、九時ごろに開始となる。踏みコは縁地に背に朝日に鶴の紋がついた上衣を着て、股のない袴（明治末までタツケ状の袴）、白足袋をはき、頭には剣カタバミ（八幡社の紋という）を付したタテ烏帽子をいただき、日の丸がついた扇子をもつ。この上衣と袴は、明治末期に近隣の鳳来町四谷から譲り受けたといい、烏帽子は同じころ氏子の奉仕でこしらえたという。囃子役は特別な装束はつけない。

こうしたいでたちで、踏みコ二人が拝殿の正面に本殿に向って、囃子方はその左側壁に副ってそれぞれ着座する。本殿に近い位置から、太鼓、笛、拍子木の順である。こうしていよいよ開始となる。

踏みコが本殿に一礼を終えると、拍子木の合図で、オオサイヤ オオサイヤとうたい始める。これと同時に踏みコは立ち上がり、右手に扇子。

その下から左手を副えて左足から軽く踏み出す。ウタイに合わせて拝殿を円く一巡して元の位置へもどり、外の方（本殿と反対方向）へ向って立つ。拍子木が鳴ってオウサイヤが終る。この時のウタイ（唱えごと）、「オオサイヤ オオサイヤ 喜びあれや我がところの喜びは この所よりほかへはやらじとオンモ(思う)」これより、太鼓、笛の囃子で三番を踏む。まず、右足をやや前方へ出すと同時に、扇子を持った手（最初は右手）で右の袖口を軽くつまんで前下方向へ自然に伸ばし、一呼吸すると、その下腕部を外側へクルクルと二回廻す。このとき長い袂が手首および下腕部に巻きつく。つぎにこの袂をつかんで前方より右の肩にかけて一呼吸あったのち右手、右足を元にもどして一呼吸、続いて扇子を左手に持ち換えると同時に右と同様の動作を左手、左足で行う。これが済むと、その場で足を四回（左足から）トントンと踏む。これで一定の振りが終りつぎへ移動（図参照）、番号の位置ごとに同じ動作を繰り返す。



### 三番叟を踏む順序と位置

5からは立ったまま（昔は足を曲げてうさぎ跳び様に）右側へ三度跳び、外へ向って一礼して最初の三番叟を終る。

こうして氏子の戸数（二一戸）だけの回数を踏む。明治初年以降、踏みコが二人になったことから、現在では一人で戸数の半分ずつの回数を踏むことになり約一時間かかる。このほか太平洋戦中までは、「願ばたき」による特別な奉納もあった。これは氏子以外、とりわけ鳳来町四谷のほか、主に塩津、荒尾清崎、田口など、周辺地域であった。

また、どうした関係からか、この日には四谷の青年から手筒花火の奉納が毎年あったという。



宵祭の様子

ところで、こうした三番叟がいつから始められたのかは明瞭でない。一説には室町末期、小代城主奥平久府の病氣平癒のため、村びとが八幡社へ奉納したのが始まりで、これによって病氣全快したと伝えられる。久府は大いに喜び、このお礼として社殿を改築、鳳来寺同様の縦幕をかけることを許したという。

また、近世この地では地狂言が盛行し、これに先だつて三番叟を奉納してきたが、いつか地狂言が廃れ、三番叟のみ残って今日に継承されたともいわれている。

以上真偽のほどはさておき、ただ、太鼓の胴内面には元禄の年号が墨書されているということなので、遅くともこの時代に行われていたことは確かなようである。

おわりに

中山間地には、いまだに山村の原風景が残され、多くの地域が少子高齢化が進み、過疎化が増しているのが現実である。こうした状況の中で消えていく伝統文化を、形では残せなくても記録として残すこともこれからは大切なことである。

現地に入る前に、町誌をはじめ関係文献を調べ、小代の巖嶽神社・八幡宮・白山神社の記述を基に調査した。次に地元の小良の夏目さん・社坂の丸山さん・洞の金田さん・井戸上の金田さんから詳しいことを教えていただき、調査にあたることができた。